

選出された文明遺跡出土品の品

南科における新たな遺跡出土品

2004年1月から南科の遺跡発掘は、正式に第2期に突入した。第1期の発掘研究を基礎として、第2期では遺跡保存や発掘作業のほかに、出土品の歴史年代の詳細な検証と年代別による振り分け作業も開始されている。今後の史前博物館南科分館の開館作業に向けて、現地標本などの初歩的な準備が進められている。

歴史年代による細かな振り分けでは、右先方南二遺跡から約2,800年～3,300年前の大湖期の地層が発見された。この時期の遺留品は同園区が初の出土であり、石を死者の顔に置く埋葬風習も台湾にある他の多くの遺跡では見られないものである。また、道爺南遺跡は1,800年～2,000年前の漁村期遺跡であるが、状態は不完全なものである。しかしながら、この2つの遺跡の資料を基にして、南科遺跡群の歴史年代の検証は少しずつ進んでいる。史前博物館南科分館では、発掘が進められている牛尿港、湾港、道爺南、右先方南などの遺跡から、その特殊性や状態の良さを中心として出土品や遺跡地の標本作成を行っていく。採取遺跡面積は200平方メートル前後が予定されており、分館設置時には重要な展示根拠としていく。

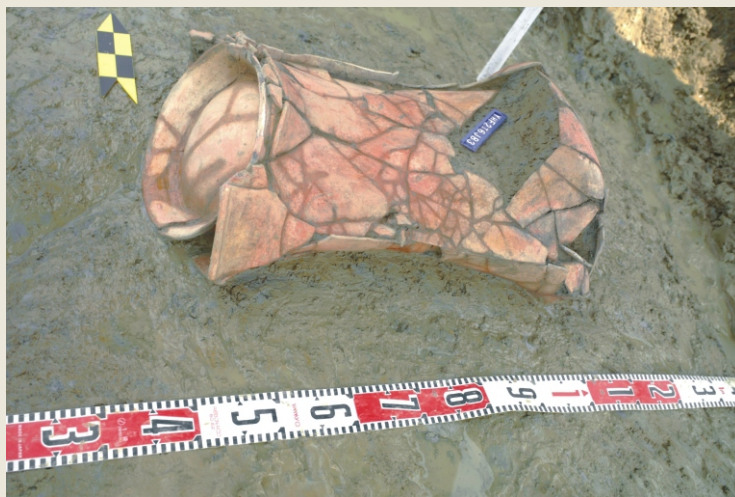


右先方遺跡からの出土品(死者の顔を石で覆う風習、現存する台湾考古学資料では大変珍しいものである)

重要な出土品のうち、高速鉄道振動減少工事予定地から発見された4つの約3,500年前の大きな牛稠子期のしほみ腰型甕からは、当時の芸術性の高さだけでなく製陶技術の高さも窺い知れる。石器では新石器時代晩期の烏山頭期の諸遺跡から出土された巴図形石斧が最も特徴的であろう。この時期の人々は特に固い材質である石英砂岩を石器の材料として使用している。出土した石器は全体的に細かく磨きがかけられており、現在園区内で発見された最長の石器は右先方南二遺跡から出土したもので長さ50センチ以上にのぼる。この他、副葬品として完全な形の陶製容器やガラス玉などが全ての遺跡から発見されている。



右先方南二遺跡から出土された大型巴図形石斧



右先方遺跡からの出土された大型しほみ腰型甕(高速鉄道振動減少工事の影響を受け、右先方遺跡において遺跡発掘を行ったときに出土、乳幼児の埋葬に使われたのではと考えられている)

現在、一部の重要な出土品は標準工場に陳列されており、その他の出土品は園区西北側の荷園工作センターに保存されている。同センターは元々私立荷園養護院であったが、考古チームを中心として修繕が進められ、教育部の補助を受けて考古標本処理センターとして改修がなされたものである。現在では4つの倉庫があり、出土した人骨やその他標本の整理の場として利用されている。また、近年の青少年教育の推進に合わせ、興味を持つ国内外の青少年に対し実習の場として開放されている。

今後の遺跡調査の重点は、園区の開発によって影響を受けるであろう遺跡内の文化遺産の保護と維持を行うことであり、同時に、遺跡地での標本採取を強化し展示品の内容や歴史調査を深めていくことである。



番俗采風図の中に描かれた糖廊に関する図説
(原図は現在中央研究院歴史言語研究所に所蔵)

台南園区は1995年設置企画された後から今日に至るまで、敷地内25箇所から文明遺跡が発見されている。進駐企業の開発行程に合わせて15箇所においては発掘が行われた。園区の文明遺跡の年代は遡って凡そ200から4,800年前となる。多くの出土品が発掘されており、出土品には種子、動物の遺骸、農耕や漁業、狩猟等の道具や石器、陶器、木器等が含まれる。2005年発掘では、「道爺南遺跡近代漢民族糖廊連灶遺跡」が最も代表的なものとなる。

道爺南遺跡近代漢民族糖廊連灶県規定遺跡

糖廊連灶遺跡は台南園区、道爺南遺跡東北側に位置している。遺跡全体は廊灶と其の他関連範囲(灰坑、大堀等)を含む。その分布範囲は東西長さ約40メートル、広さ20メートル、面積約800平方メートルであるが、関係する近隣地域との展示需要などを見越して、考古チームは遺跡が発見された北側の始まりから道路と計画された地域までの間を同じく保存範囲としてするべきだと意見をまとめた。その結果、保存範囲は総面積で約4,465平方メートルとなる。蕭瓊瑞教授、何傳坤主任、吳培暉教授、陳嘉基教授、黃文博校長専門家が立会いのもと、現場検証が2005年1月17日に行われた。1月24日に審査許可され、県規定遺跡の認定を受けた。この糖廊遺跡は台湾で現在発見された唯一のものであり、その特殊性と希有性から、大変珍重されるべきものである。